

随想

『反貧困』という本を読んで

「弱者」をめぐる視点

加藤 宏光

『反貧困』という本がある（湯浅誠著、岩波新書）。非正規雇用による労働者の苦悩と悲哀を問題として捉え、今日の社会の一面を批判している。

派遣村の村長が執筆したこの本は、二〇〇八年四月二十二日に初版が発行され、二〇〇九年一月には第一〇版を重ねている。それだけの人々が興味を惹かれて購入・購読したのである。

内容には、《運に見放され人々》の履歴を披露し、『彼らがいかに、社会の被害者であるか』を声高に主張している。

一読すると、いかにも、然りと思われる。例を挙げてみよう。

新田久さん（仮名）は不幸

な生い立ちである。彼の父親は兵庫県で二〇人ほどの従業員を雇い、建築業を営んでいた。仕事中に煙突から落ちて片足を失った父親は、その後、時計修理の技術を学び修理工として生計を立ててきた。しかし、彼が小学生三年生の時に、脳溢血で倒れ亡くなった。その三年後母も過労で亡くなった。兄弟のなかった彼は一人伯母に育てられた。伯母は喘息で咳込むのをうるさいと、時には彼を物置に寝かせるような処遇で育てた。希望した美術高校への進学は許されず、全寮制の高校へ進学、馴染めない彼は一か月中退。一五歳あまりで一人暮らしを始めた。

両親の生命保険を管理して

いたはずの伯母からは二〇歳のころ数万円を渡され、それが全額と言われた、と言う。最初の職場は時給六九〇円のガソリンスタンドでのアルバイト。真面目な働きから、向かいのメッキ工場にスカウトされた。自衛隊へ入るため一八歳で退職した彼は三年で自衛隊を除隊し、おもちゃ販売、パチンコ、旅館を転々とする。すべて衣食住完備の職場である。二〇〇五年の上京までに約三〇か所の職場を転々とした。

上京後の出会いで伴侶、直美さん（仮名）を得た。彼女も不幸な過去を背負う。直美さんは精神的な病に悩まされていた。多感な高校時代に父親が交通事故で不具となり、

生活保護下の極貧環境に適應しきれなかったことによる。高校卒業後服飾専門学校に入学するも二、三か月で中退。その後、家に引きこもった。二〇歳の時のアルバイトも三週間で挫折。二五歳の時専門学校に再入学するも病気で中退した。何とかやり直そうと東京に出てきて、久さんと出会った。

——中略——

その後、種々の条件を加味して、比較的所得の多い派遣社員として、長野の自動車部品会社に単身派遣された久さんの給料は手取りで月一五万円（二、三万円のうち七万円は寮費）。三か月で契約終了。半年後にまた自動車部品工場（愛知県）。ここでは寮費を引

いて手取り一〇万円。妻の実家への仕送りができないため三か月で自主打ち切り。ややあって、二〇〇七年四月に東京のコンビニ弁当工場へ派遣された。労働条件は二四時から六時の六時間労働で時給一、〇五〇円。さらに社会保険完備との提示であったが、実際には二三時から翌日六時までの労働で時給一、二五〇円、社会保険はなしであった。一〇時間(※著者注・残業があるのか?)の労働時間中物理的に休憩時間が取れない環境に耐えられず、二人は五日間でやめた。その結果寮(寮費七万円/月)を出なければならなかった二人は仕事も住居も失った。所持金は一万三、〇〇〇円。その夜からネットカフェに宿泊する生活が続く。

——以下略——

第八回大佛次郎論壇賞、第一四回平和・協同ジャーナリスト基金賞・大賞をダブル受賞したこの書物には、死まで追い込まれることを、自己責任と言いつける人として、人

材派遣会社ザ・アール社長奥谷禮子氏の意見をとりあげ、糾弾している(六九ページ)。

奥谷『経営者は過労死するまで働けなんてとはだれも言いませんからね。ある部分、過労死を含めて、これも自己管理だと私は思います』

風間『過労死を含めての自己管理ということですか』

奥谷『そう、自分の健康状態はどうなのか。ボクシングの選手と一緒にすよ』

こうしたやりとりの中で、奥谷氏は以下のように主張している。

●弱い個人が増えている。そのため、自分を守る主張をしなければならない。結果をもって被害者になり切る(シユレッダーで子供が怪我、親の管理責任↓社会が悪い、企業が悪い、責任転嫁)

●格差社会とは自己努力のなさをこの言葉でごまかして、社会がそういう人を買やかしている面がある。

確かにこの意見は過激である。しかし、湯浅氏は彼女の

意見に対して、弱者が自分の意思を通しきれない圧力が社会からかけられている、と自己の意見を展開している。

弱者のサイドに立つ意見は往々にして世論の同情を集める。自分が弱者サイドに立った場合を無意識に想定するからかもしれない。そうした立場に立つかもしれない人々の数は、圧倒的多数である。そこで、大きな世論としての力を社会への波として掻き立てる。

冷静に新田夫婦の事例を解析してみよう。彼は確かに不幸な生い立ちをもっている。しかし、最初にスカウトされたメッキ工場を辞めて自衛隊へ移ったのはなぜか? 自衛隊を三年で辞めたのはなぜか? 手取りの多い派遣労働を選び、二三十万円の月収を得て、家賃七万円。やや高い家賃であるが、どうして単身で住むのか(二人で住めば節約は可能であり、二重生活がコスト高であることは自明であろう)?

夫婦で住み込む弁当工場の職

場での社会保障がない件についても、その分として二〇%の割増をもらえらという条件である(通常雇用人件費の二〇%程度が社会保険料)。そこを五日間で辞めたのが被害者としてのイメージを強めているが、その弁当工場で働き続ける人々はどう思っているのか(海外労働者が多い、との記述があるが、海外労働者が働き続けられる環境は日本人には地獄であるとも言えるか)?

弱者を痛めつけることは本意ではない。と言っても、彼らのような履歴をもつ人々がすべて被害者で、社会(会社)はそれらの人々への加害者であるかのようなタッチでのこの書物が大きな反響を呼ぶこと自体不健康であると感じざるを得ない。

自分が雇用主として、あるいは同僚としてこの夫婦のような人々を受け入れられるだろうか? 加害者が『自分は被害者だと信じ込んでいる』ことは救い難い。